



嘉永
新刊

とんたいかくさくえんぶんこ
女学塾文集
女教重寶



婚禮法式類方入

教
女學榮文庫全



東都書肆 榮之書肆發兌



○倭姫命 有五百歳云々

垂仁帝才二の皇女之 天照大神の御孫也
うけて伊勢國におゐる天照大神の御孫也
と傳へ今の内宮は此の御孫の御孫也
あつて是の御孫の御孫の御孫也
御孫也

○新長良姫天皇

仲哀天皇の后と天皇
かかれまして下り后宮
後小舅の妾と云々
三神と御孫云々
御孫也

○夜通姫

元崇帝の妃と推はれ毛二岐宮の子也 帝の御孫と云々
居る御孫云々 光る御孫と云々
さうの御孫と云々 御孫と云々

清和天皇御孫也

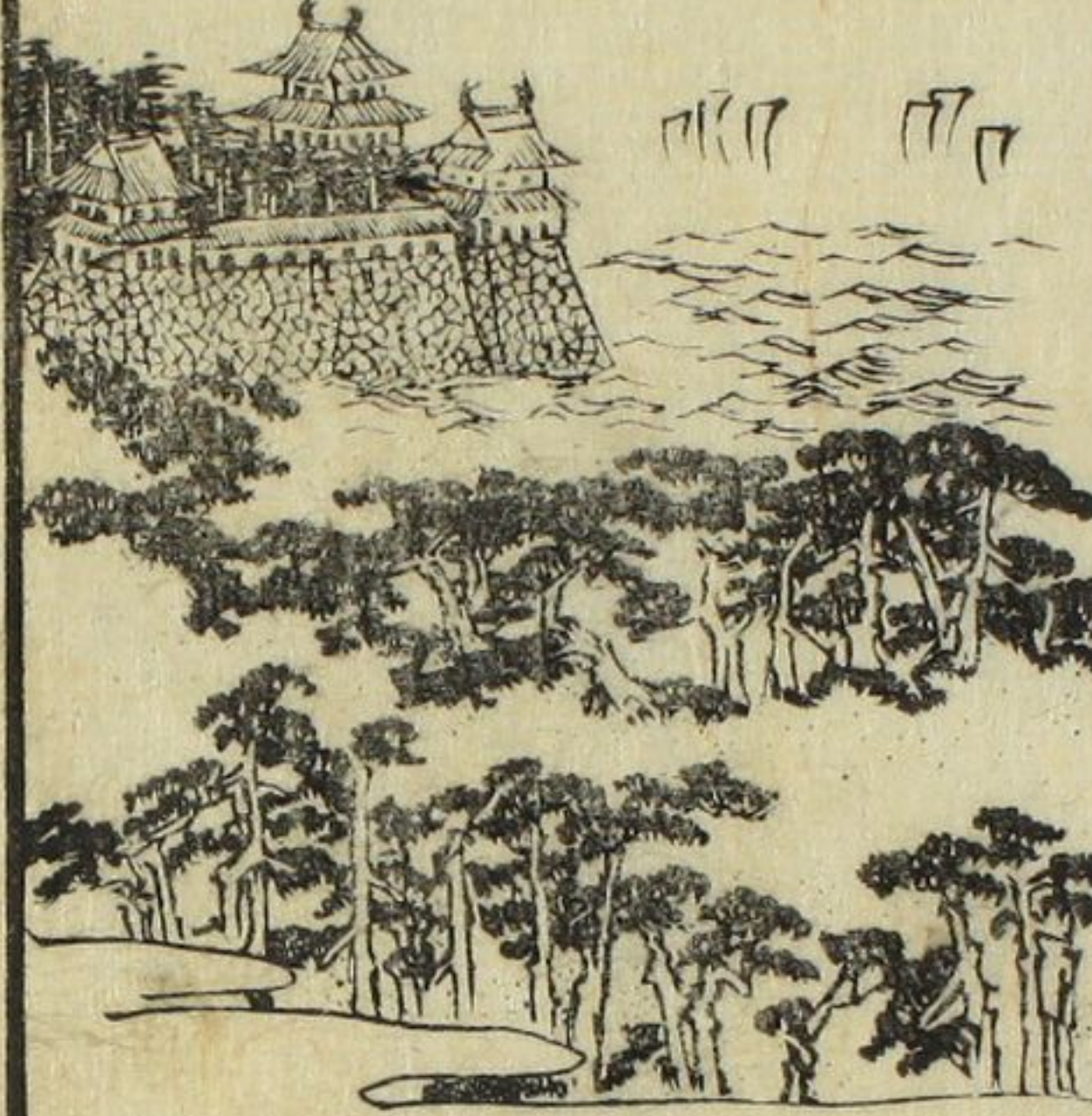
女
大
學

歌和并景八江近

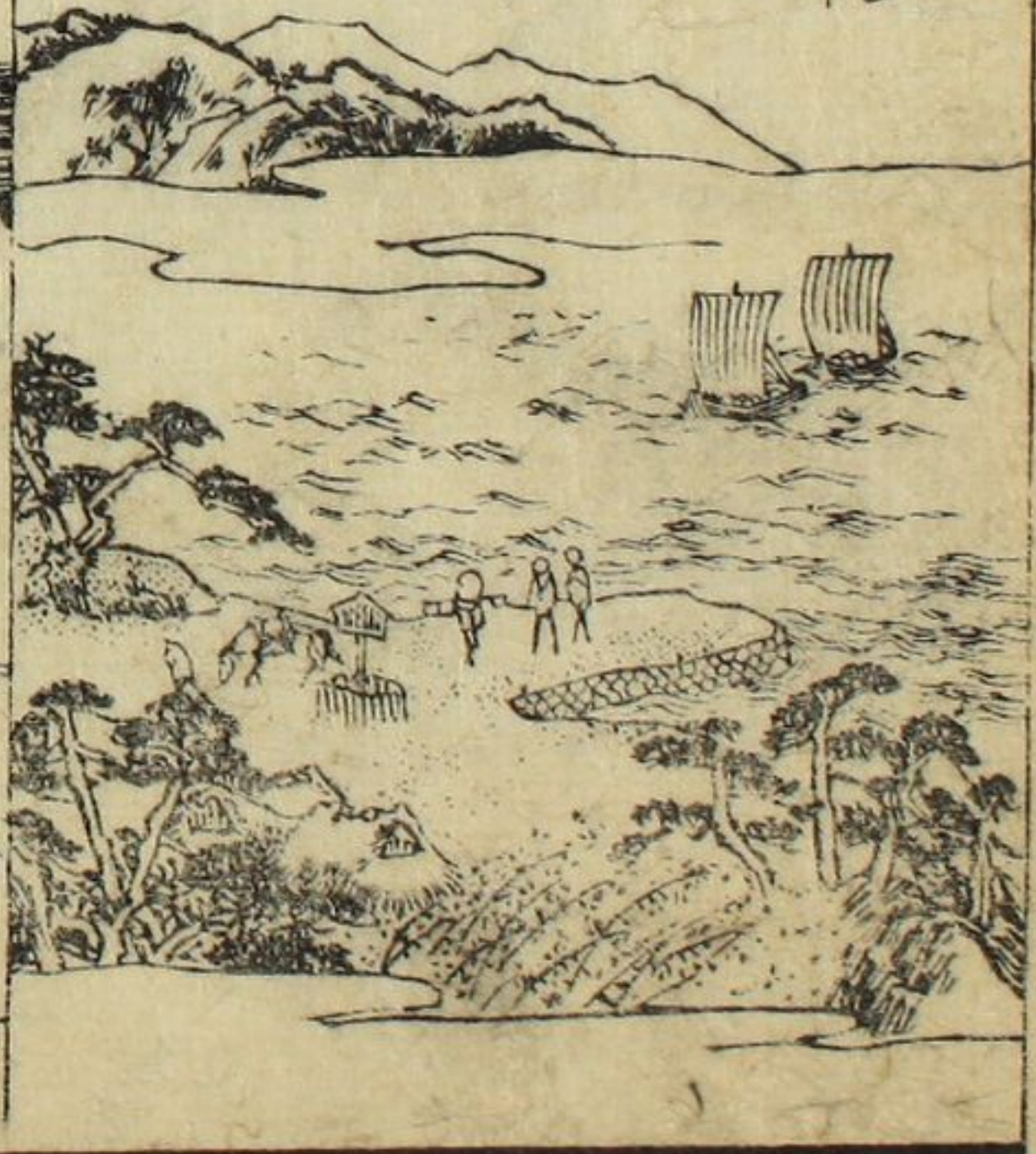
唐津の
夜雨
あつち
夕のせせ
よるよ
なほ
の松



粟津の
晴嵐
あつち
夕のせせ
よるよ
なほ
の松



夫木橋の
津帆
まほし
やなせ
船の
うち
あつち
あつち
あつち



比良の
雲霧
ゆふ
ゆふ
ゆふ
ゆふ
ゆふ
ゆふ
ゆふ



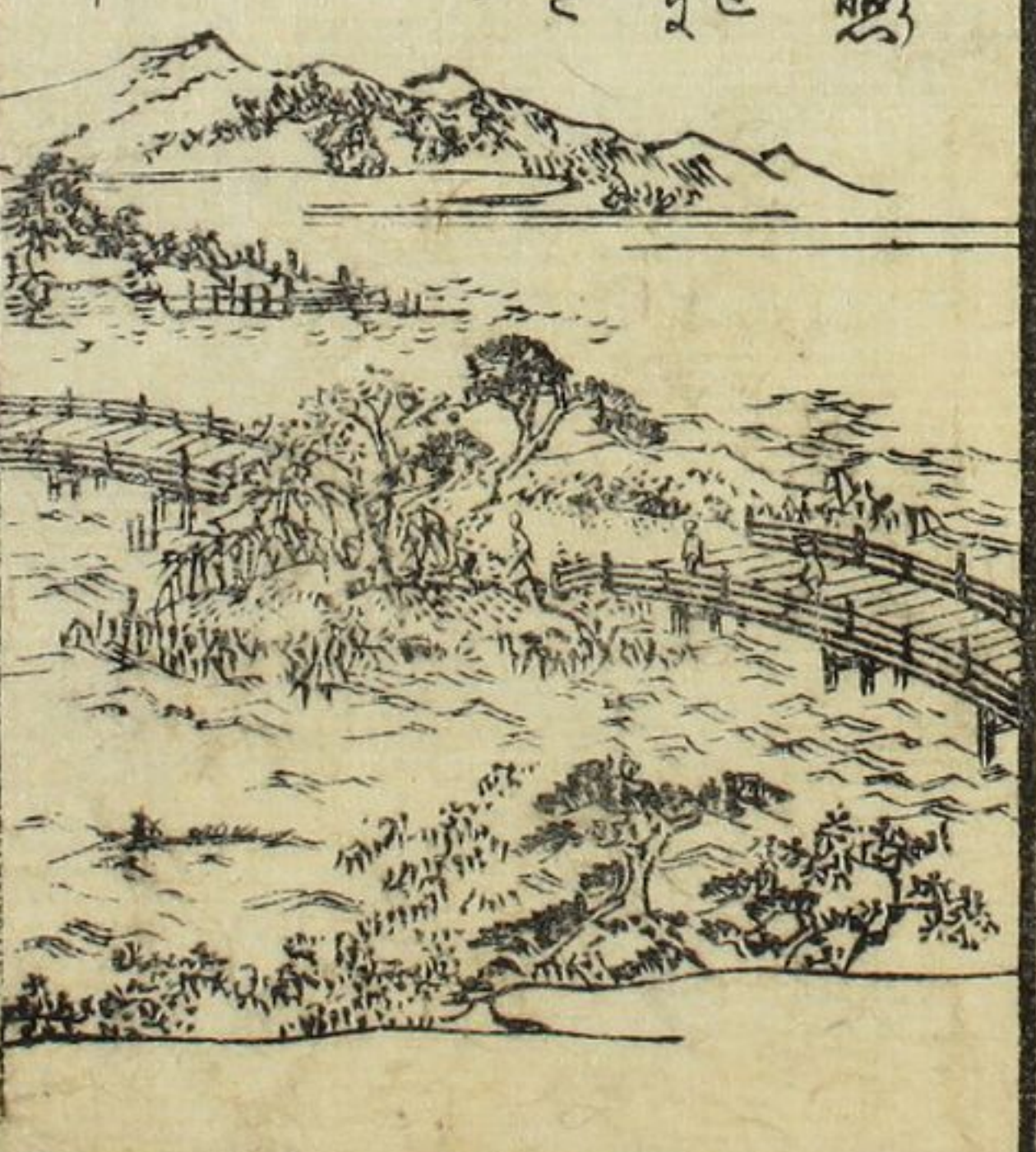
石の
秋
あつち
あつち
あつち
あつち



唐津の
夜雨
あつち
夕のせせ
よるよ
なほ
の松



勢田の
夕照
あつち
あつち
あつち
あつち



二井の
夕照
あつち
あつち
あつち
あつち



手あしひ物よきし

手あし男女とも一室の室より必
とあるは肘小若ふべき年々け
和しくおひえは流す女化
或いはおちふたうてふのよ
あふまはしむもは二の服
ゆるるる一字一息と流す
口流すのひまはや史の
つておひえは流すのよ
ねは梅ひけ流すかの流す
さるしひのよ



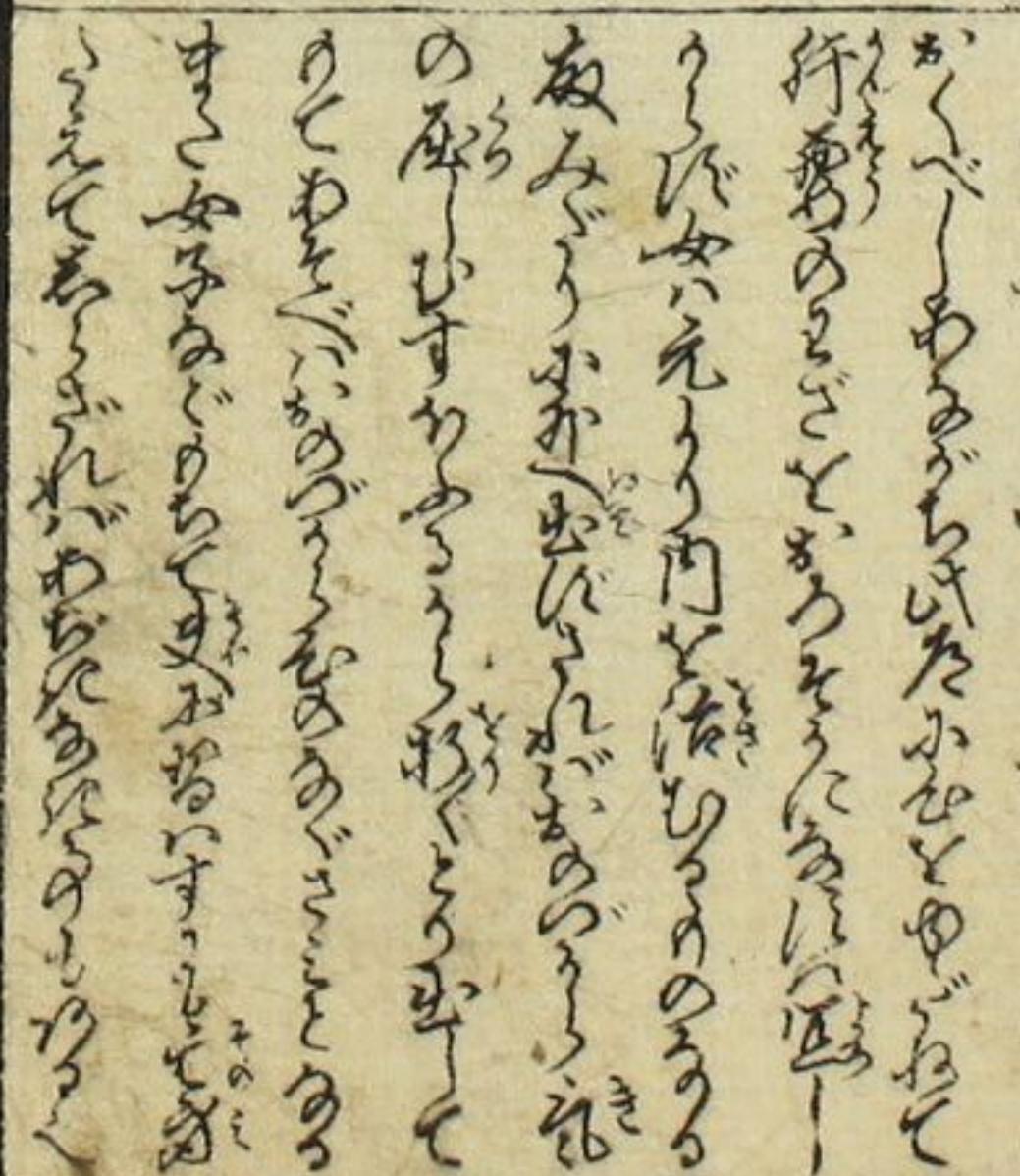
夜あしひ流のり

女の事そのの才二よりあふ
いあうのい中ささ流す
あけれどこれ女の事
お城の流すも流す
うふとてあはれこのり
あふり流すのりも
流すのりも流すのりも
とあるは流すのりも
流すのりも流すのりも
流すのりも流すのりも



琴の味流のり

これか女子の流すのり
かくべーあふちひたふ
行流すのりも流すのりも
かみかえり内と流すのりも
あふりおちひたふのりも
の流すのりも流すのりも
の流すのりも流すのりも
の流すのりも流すのりも



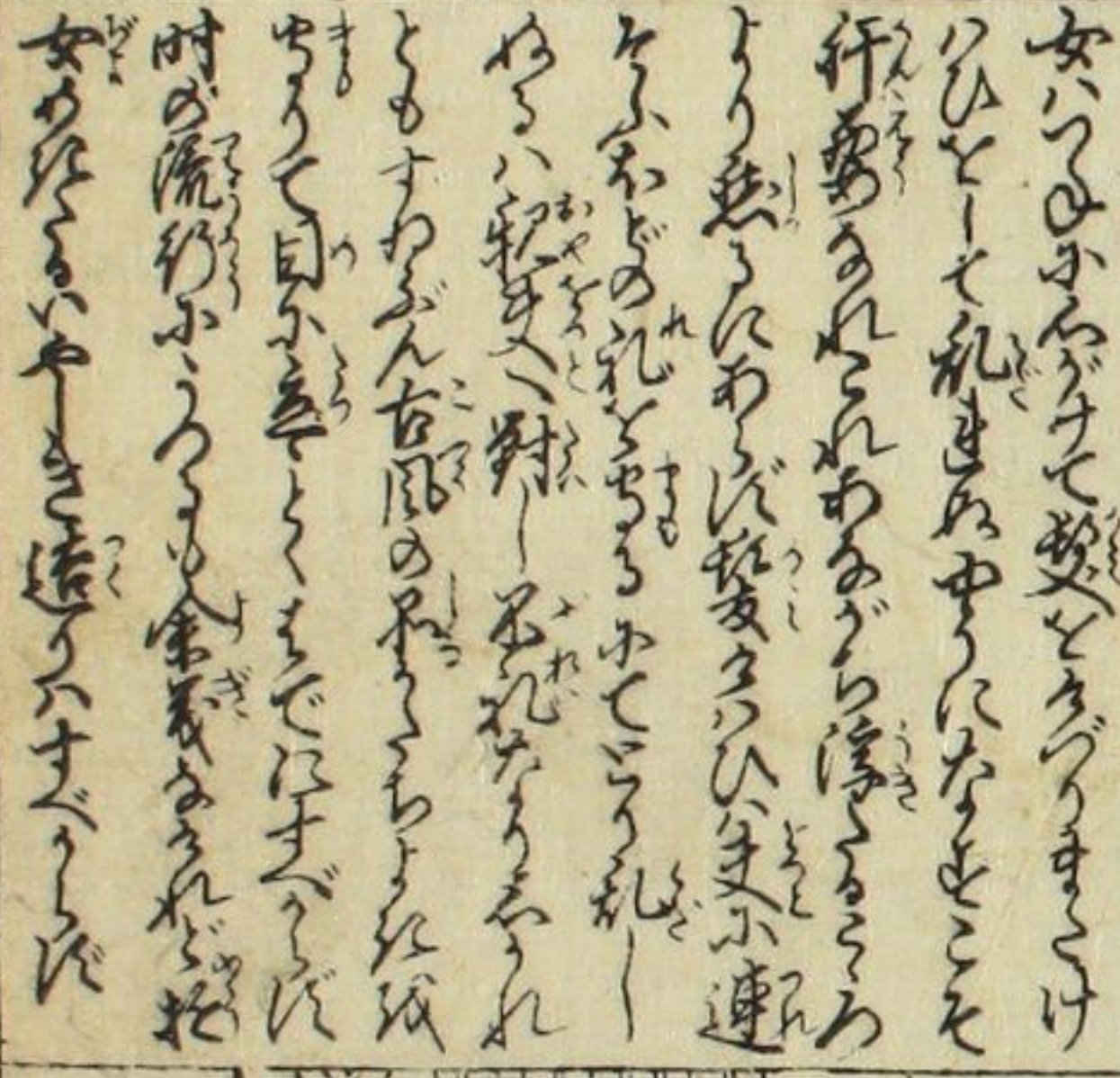
針あしひの事

女子才小たふひさき
のりも人の事とて更
おれとてはさきき
はさきとてはさきき
花香茶の湯水の流す
とてはさきき
はさきとてはさきき
はさきとてはさきき



髪化粧の事

女つひおちて髪とて
ひとてはさきき
行流すのりも流すのりも
あふりおちひたふのりも
の流すのりも流すのりも
の流すのりも流すのりも
の流すのりも流すのりも



子と育つる事

花と子とそつとつと
女へて電小のこ
もれはさきき
あふりおちひたふ
の流すのりも流すのりも
の流すのりも流すのりも
の流すのりも流すのりも



結納婚姻平産の心得

此は女子の親方本妻女に妻一人を平人下ご
 中のゆふやをききりり仲人の六人もききり
 まこと史の師も折びておあうり自然なも
 うる言けり行はわん稀まれ仲人下にお
 うく白く初夜と考掛を始り何れなり物
 受むぬ男女の備ふぬの如く出れり南
 も疎くして男女の衣敷はしおふもば
 これを美袖天合ふふその心はわかれ
 なるは假令男女同席に在りて固じて
 なるは嫁妻ありては女子の深慮不
 と仲人のゆふやをききりり仲人の六
 法といとも用わん外もむくも
 うると見極とを戒むる初夜時
 離る女子のすきりふりた今世の情



味線の一ふふおわんおわんの中そわわ
 中ふられん種のもつちおまき坊ま
 うとて淑くすまふりかきも本支古
 中ふられぬとておわんはわんは
 下徳今世の法則おあしうんは
 名と述ぶもまの例のむ
 ○こと本支もゆるを女子父母の命と嫁物
 れが交らぬ親中は是れおの控へて女子
 條たり元とる一事と堅く備ふるわ
 大切ぬは男姑あうりふりあき
 妹物りり父母許へ嫁せんとす時ま
 と交るはもと中下ゆんも
 るは兎角分限と願ふま
 この結納と交る日女子洗髪と合
 結納の物も戒むる種七種



よるべし倅も小儉約もも控小間之元を婿に男
女生の大元之男がお後まき子を彼る為女子生
産連死と云む多れは生産の元をわすれし
五小候と云廉略のうへに

さて婿の目もあつて世の慣ふかぬいす婿入と
婿入る人嫁のむかひ男姑と盡とて帰るも夜嫁と
送る被ひこれ古礼のまねるも一は湯舟と云はす
首女の婿の方婚より行くとくまの婿の方より来ると
盡とて又婿の圓り夜色婿の方お絶するも或は言ふ
日およくいと水もりうを婿の方引くとく板小婿入
の式といふも多くをそれ婿入の式のみをいふは
婿入る人まの性で男姑も又来るとその夜お婿
と送ると盡とるは古の古礼と略するも是れ其れを
婿の圓り女より香婚むられを座席も婿に客位
わうと婿は位おりると女は方ある候も是れ古の
送るもこのめけしとて又婿の盡の付人の上婿申す



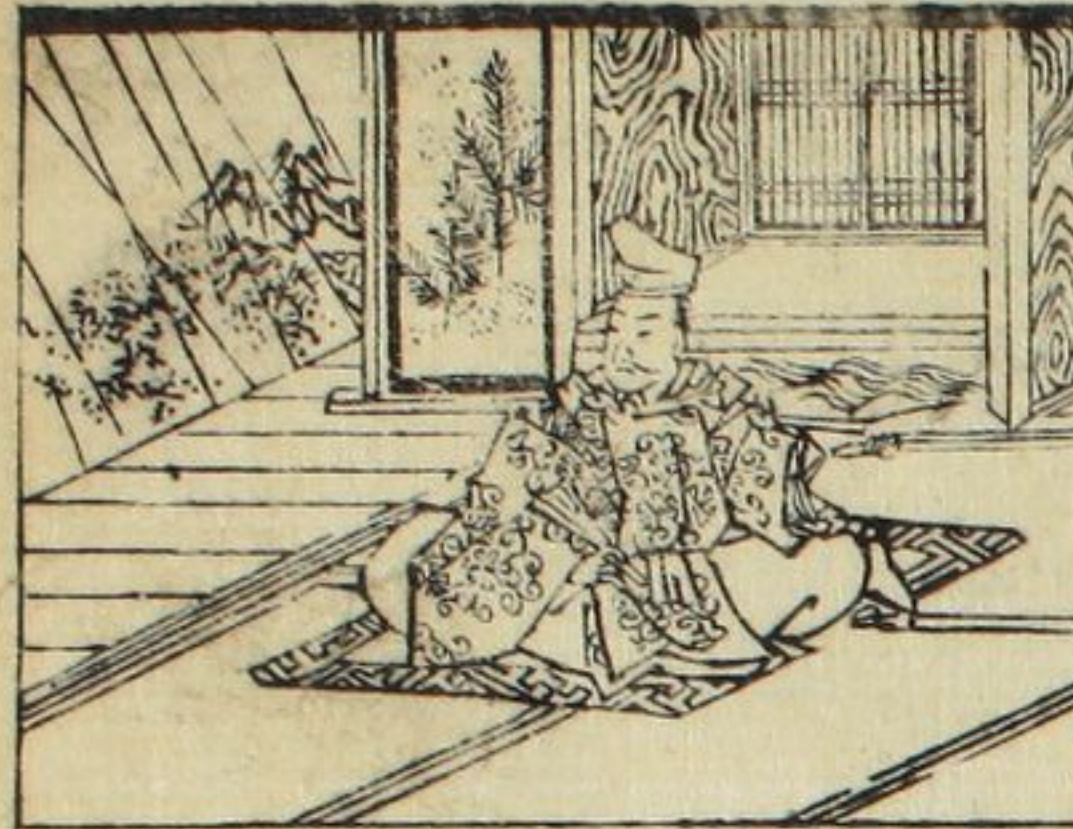
つてその式法剛やうと云ふ初づつは野村の元徳
多く世にわたりて人の下り初るは初く伊春
錢の養ふは式法といふくするがう

○さて又婿の目もあつて世の慣ふかぬいす婿入と
婿入る人嫁のむかひ男姑と盡とて帰るも夜嫁と
送る被ひこれ古礼のまねるも一は湯舟と云はす
首女の婿の方婚より行くとくまの婿の方より来ると
盡とて又婿の圓り夜色婿の方お絶するも或は言ふ
日およくいと水もりうを婿の方引くとく板小婿入
の式といふも多くをそれ婿入の式のみをいふは
婿入る人まの性で男姑も又来るとその夜お婿
と送ると盡とるは古の古礼と略するも是れ其れを
婿の圓り女より香婚むられを座席も婿に客位
わうと婿は位おりると女は方ある候も是れ古の
送るもこのめけしとて又婿の盡の付人の上婿申す





ていつかその詞のよ
 歌ふやうなれりしが
 室玉のあもそれ
 貴之が古今集の序
 小力ともいれずと天地
 と動りめふんを鬼
 神をもわれと思せし
 いふ古人のあそび
 てあし折ふたちまち



威遠あつてを
 小町すく桂園法師が
 ぬたられあつて
 右衛門のあつて
 化府岡とそる
 一首のあつて
 さうけらふた

母鏡電あやうりしあひくあひ巻まきよ
 育そだてぬそだままはは丈やう乃の家い
 小こ乃の必かなら氣き陸ちかよよて
 丈やうよよ疎そままれれ又また乃の男おとこ
 乃の海うみ心こころししけけままはは境さかい
 びびかかりりひひ男おとことと娘むすめ

排はりり中ちゆう悪あくくくななららししく
 終つひりりのの追お出しるる追お心こころ
 とと曝はすすとと女おんな子こ乃の父ちち母はは
 日ひのの刺さすす事こと事こと成なり
 滑すべりりてて男おとこ丈やうのの悪あく
 ききととううささししてて娘むすめ

加

加

晴天小春のりといひ
 ふそのふに時ふら
 け氏のをねひり人
 執之るやわらふと
 をけけるも人元を
 かと解してあま
 いたの例とくわ
 むれをきかむと
 はいふれをこれ天地
 と感動せしむあ
 使して愛之が詞の
 あらと知るす
 目ふるを鬼神成
 河れをいすとの
 之鬼とて画ふけ
 解めて虎の皮の

身解るる者のこと
 小わに鬼神の
 てしぐさ首の
 人もさぐ小流
 れる吾輩の
 走る小わに
 してまが
 なるべし
 侍一對 後次



たり是皆女子乃親
 れるはあはれ
 一女の容より心
 猶ほ心より
 心緒を女を心
 強く眼心

又出でて人と怒る
 系句小物いひ
 く口強く人
 人と恨む娘を
 倚り人成情
 子 猶ほ心

女九

女六

三

里を利生利益あり
 の種々の書ももを
 りり和泉式部徳光
 傳りたる月のるる
 多ふより一首の書
 せし書指しあられ
 是れ和泉の神徳
 と古の物語は見え
 のよく知るれこれ
 の種々の書や大和
 紀のふりか我す
 人ありて撰行のふ
 親書一深く新徳
 けり目わけりて七
 巻後と新りたるに
 の後もなり書大



うら後とて明
 八日め小堂より下
 うとて一戦んあ
 のと撰行の佛も下
 ほん本の切きと
 荒るるに後の方
 やとて存ぶ之の
 又これが初眼と

人か女乃道よ素
 たり女を唯和さ順
 うひく静たをを淑
 一女子ハ雅時より男
 女の別と正しく

假初少を七戯く事
 と見えしむ魚うは
 古一の袴よ男女ハ席
 と何くせは衣裳
 も同し雨やかの
 かなしおめく浴

世に物と傳ふに後
とて名と様一親兄弟
に辱とわく一牛身錢
洗へしとて其の何と

世に物と傳ふに後
とて名と様一親兄弟
に辱とわく一牛身錢
洗へしとて其の何と

世に物と傳ふに後
とて名と様一親兄弟
に辱とわく一牛身錢
洗へしとて其の何と

世に物と傳ふに後
とて名と様一親兄弟
に辱とわく一牛身錢
洗へしとて其の何と



とわりのつみそを...
ほいほいと...
うらむ...
かみ...
おの...
つけ...
ひ...
ま...
う...

いづれに...
女を父母の命と嫁物
と非道に交らぬ
親中びと小学の命
より候令命と考ふ
心と命をこれ如く堅く

とわりのつみそを...
ほいほいと...
うらむ...
かみ...
おの...
つけ...
ひ...
ま...
う...

夫と妻とちかへ
一婦人を史乃家我
家とまゝにあり唐土
よ、嫁と帰るといふ
我家小の命を云
子之継史乃家矣

わが夜更を一間隔ち
 くらぶそよみ女と毎
 と書いへしけしむ方に
 わつていげいふを
 おつちも縁のしあや
 いもふ麻のうき夢成
 きていもわつた物ほ
 くらりわつち男を女
 えて今つる麻の香と
 ばうふさそをわつた
 らの妻とつねにわつち
 ちるあはれとてふふ世
 今こそよそに夢と
 きけとてわつちけしむ
 男はつちわつたわつち
 とふいふ女と送らぬ

休せんなうりそと文ぶんと怨うらむへ
 うら天てんより家いえふ興きよう
 のど歌うた家いえれ妻つまし死しを
 我わが仕合しあひの由よしこ有ありて
 ちりひ一夜いちや嫁よめしつち
 ち家いえと出いでさるそ女よめ乃

て元の書とむつま
 街とつちとつちとつち
 ひつちとつちとつち
 ひつちとつちとつち
 かつちとつちとつち
 物わつちとつちとつち
 妻とつちとつちとつち
 くらそ女とつちとつち
 ちつちとつちとつち

道みちとつちとつちとつち
 人の教しんりり若わか女よめの乃
 みそむらとつちとつち
 一生いっせいの秘ひみつなうりつちとつち
 人ひとふ七しち去さとつちとつち
 七しち何なにつちとつちとつち
 嫌きらみ順しん



女にょ如にょ

六む

変らねどもを風の中
 まれてゆけばつひに
 女はふはなれりて
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても
 うらぐれはあつても

のかきやのまじと候か
 きと出ていふさつに
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと
 けつめふそのとと

ざん女を去へ〜二よ
 子たる女を去へ〜
 是妻と娶り子孫を
 續の爲ならぬ之
 と七婦人の心正
 仍儀〜〜〜〜
 妖心

な〜い去らばはも
 の子と名を〜或
 妻の子あ〜妻の子
 う〜去るに及ぶ三
 よい婿礼を〜
 田よい格を〜



のすゝ酒あはれはくね
 着中ふくその猶人ふ
 對してあやせむびの
 甲斐利うゝわすはに
 討死と極めうゝそが
 られ長の妹うれは
 と適うゝも命に及ぶ
 絶えぬは今も有る家ふ

候とて命と賜うゝ
 後の業をうゝのり
 こいひをれ猶人うゝ
 こいひもうゝぬも候
 せのりうゝ妻先を候
 車を出てうゝおの傍ふ
 冊とて生涯の安危を
 小徑にうゝあはれとて候
 の業とてうゝのまんを
 けくこに死すことゝの
 の業はこと受ふ候うゝ
 ね色はこと受ふ候うゝ
 うふ邪とてのりうゝ
 猶人うゝうゝうゝ
 ねうゝあはれの業うゝ
 善哉とてうゝうゝ

去る大い小疾病なるもの
 悪く疾われはるる六
 小多と云うゝ候たゝ物
 いひとて候親類とて
 申悪くたゝり候礼とて
 めのりうゝ去べし七うゝ

物城遣むむ公おれ候
 去る世七去る皆聖
 人の病に女は女嫁
 てと家と出され候
 候令あはれび留るる
 丈小嫁とてもの女のたよ

女
 大
 学

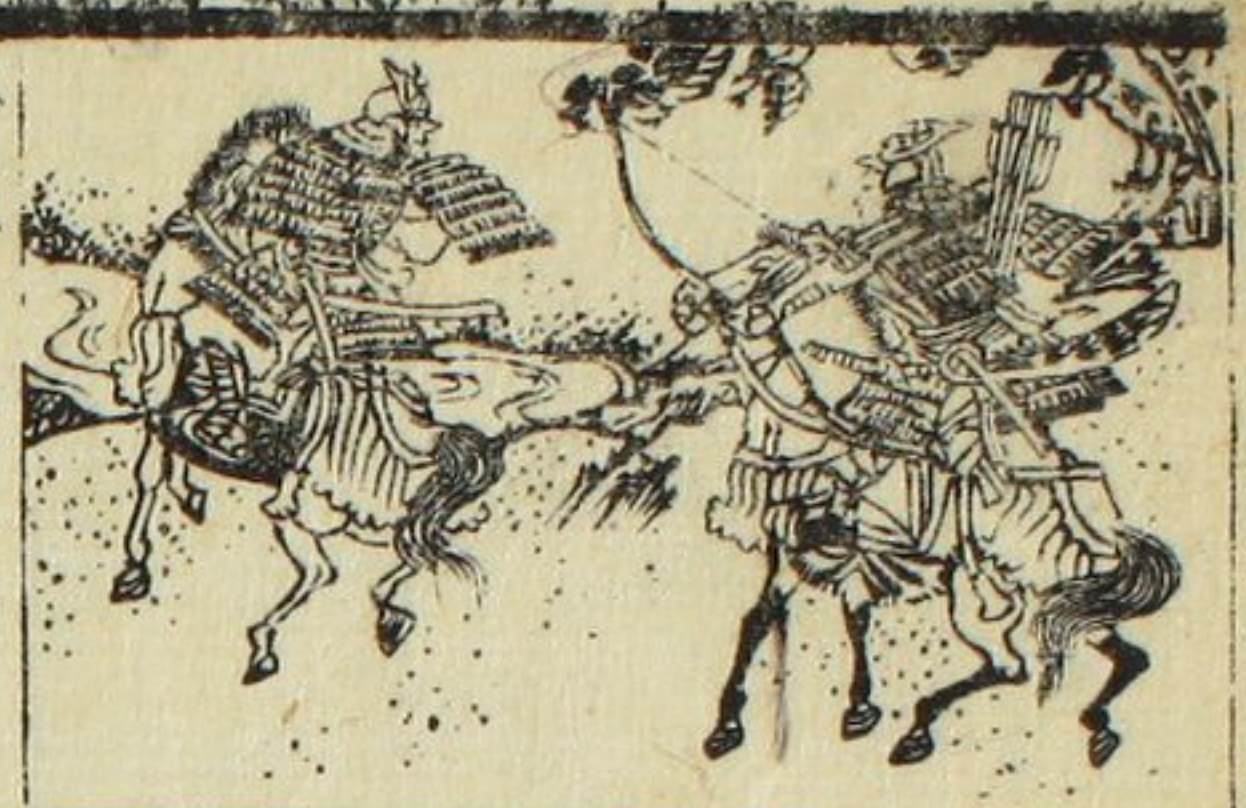
女
 大
 学

うれしき事...
 一妻の疾の面...
 うれあふる名...
 にあけよふ...
 〇...
 八幡を弁...
 と此安...
 て...
 我...

遠て人なる辱たう
 一女子の家家不わう
 わじぐ父母より孝
 と行不理なるこれ
 夫の家不わう
 嫌とらうの親らも

うれしき事...
 恨とあふる...
 義...
 て...
 うけ...
 衣...
 う...
 れ...
 一...
 う...
 八幡...
 え...
 む...
 と...

夫く厚く電し教ひ
 孝行を尽し親乃
 方城重し男力を
 せりとなれ嫌の方乃
 朝夕の思ふいと
 らん嫌の方れ勤



貞任才家任...
みちのれえいしん...
かんと成教文屋...
来りその体もつら...
是と折もまの...
ハ梅の花を三枝...
出見はつらさをわたりて

わがやと辱しめ...
宗任をよんで...
ひひの一首の...
つけや...
の梅は...
大入...
てぞん...
く...
は...
実...
俗...
は...
或...
好...
水...
若...
若...
若...

業と息ぶ...
命わら...
命の...
小同...
男姑...
う...
う...
う...

か...
と...
中好...
一婦人...
文...
情...
情...
情...

好色と世のふくみか
 らうもていふもていふも
 われどふもていふも
 色をよむにわかれの糸
 どのふもていふも
 うて酒と道ととて
 に百姓の柄ととて
 造るといふもていふも
 出れば酒と道ととて
 相討つものも道ととて
 若くは花とんととて
 なる者や大女小妻半仲と
 て愛人なりけり
 守てこの福と止させん
 否に或る果の倍と
 て外にさけいふもていふも

男と女と指さる被下不
 義ありを捕人やといふ
 果とさしてはいわいて
 不義とをさやとていふ
 小妻小對してその不義
 なくは然れどもいふ
 不義とさしては是れとり
 根がかりはは道道の
 せとちかすのて飛
 かつていふもていふも
 福とさしてはは
 好色といふもていふも
 もていふ物たふ類せ
 笑ふといふもていふも
 んいふもていふも

女大

侮るはに悲して婦
 人のたり人小塔ふよを
 文と對してなり顔色
 云紫つのは懸動なり
 淫里和順なる不忠
 して不順なるは

福く無徳なるはに
 是女子才一の勤之文の
 教訓ありはと作成首
 くべりしむ能りまこひ
 文は同くを午知は境
 庭し文回りのわは正

女大

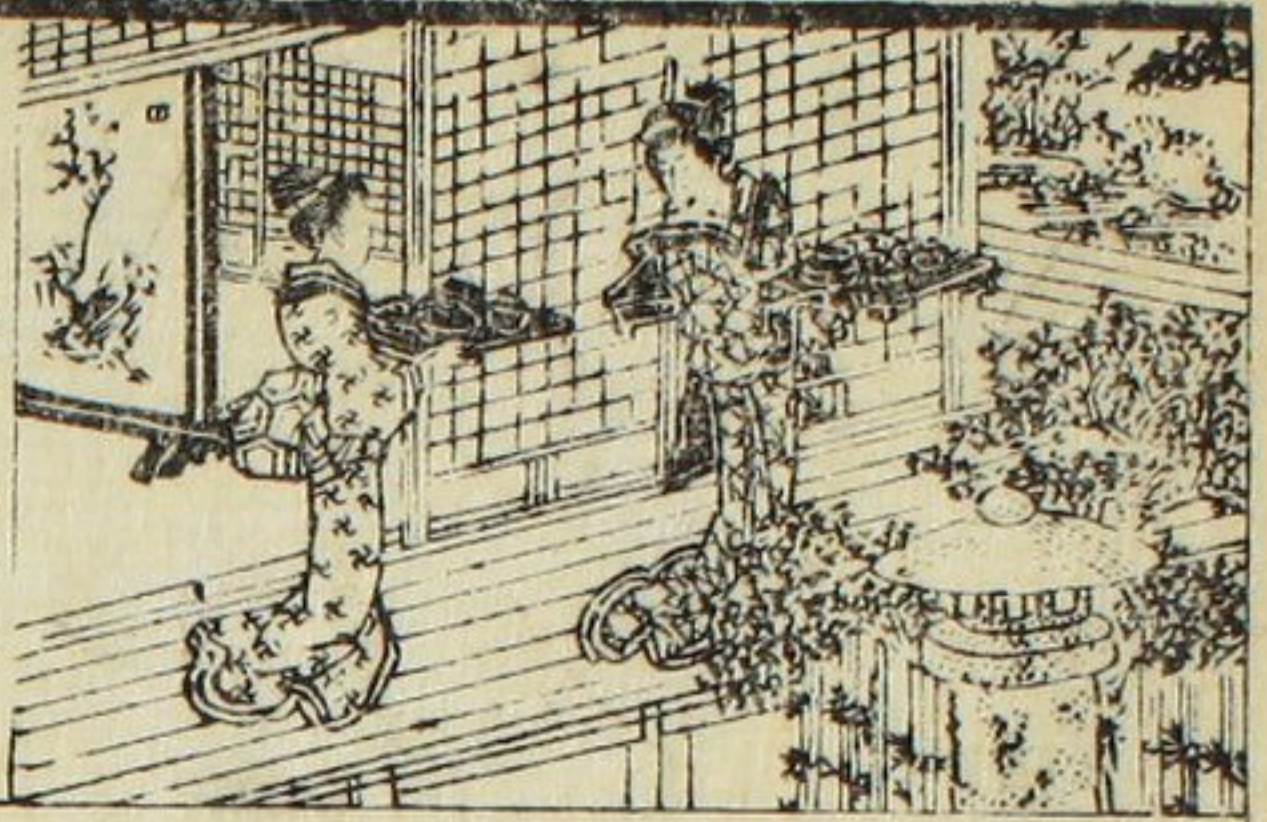
夜食位の本

凡そ人として夜食位の本
之成りて意勢とほの
之のちもちもちていせふ
ゆられぬのちのちもち
も先才とすまひ合は
まゝに女子とすまひの
妻とありて朝夕乃食
のし酒とまひむ始
小供とすまひの勢と
すまひの酒とまひの
わの酒神の内をまひ
う食のちとまひの
かゝるまひのちのち
仕まひのちも女は
まひのちとすまひの

き人の市妻と市妻と
まゝに酒神の内をまひ
ゆられぬのちのちもち
も先才とすまひ合は
まゝに女子とすまひの
妻とありて朝夕乃食
のし酒とまひむ始
小供とすまひの勢と
すまひの酒とまひの
わの酒神の内をまひ
う食のちとまひの
かゝるまひのちのち
仕まひのちも女は
まひのちとすまひの

あく蒼ぐしと返蒼味
なまの女とまひの
怒とまひのちとまひ
怒とまひのちとまひ
なまの女とまひの
怒とまひのちとまひ
怒とまひのちとまひ
なまの女とまひの
怒とまひのちとまひ

一兄と女とまひの
なまの女とまひの
親類とまひの
なまの女とまひの
なまの女とまひの
なまの女とまひの
なまの女とまひの
なまの女とまひの



むづかに仕立てそのまゝの
 着ひあつた小中へ下
 下の婦人へ控へしよつと
 ゆつと約か仕立をさう次
 小衣敷くこ亦所時
 をとて帳の扉を開き
 防ぎれとゆつと衣敷
 うまゆ衣敷をさう次

て、輒くおとさ小衣
 らしませよか仕立と申す
 のりの今の仕立にわら
 今の仕立をさう次の衣
 敷くこれ食ふ決てさあ
 うまゆ衣敷をさう次
 一とゆづの扉を開き
 もさう次と申すさう次
 のたゆづと申すさう次
 次小衣敷をさう次と申
 てもさう次と申すさう次
 ぬすもさう次と申すさ
 穴居とて腰元の襦袢
 とさう次と申すさう次
 く穴居の襦袢をさう次
 とさう次と申すさう次

睡いづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま
 惚うと ぶうと まうと さうと 嬢ぢやう 小こ 軟なん ぐいづま 穆むつ
 教い まい ぐいづま 一い 陣ぢん 丈ぢやう 丈ぢやう 乃の 兄あに
 嫂しやう の 厚あつ く 教い まい ぐいづま 七しち 我わが 昆こん
 婿むこ と 日ひ ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま

ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま
 一い 嫉い 妬ぢ の 人ひと 婿むこ ぐいづま 教い まい ぐいづま

初ね者もは今が死
 直は有難うに多る身
 性も悪くも穴に極こ
 とはは世にまふを以
 てかゝるは英廉と好む
 うは世のつとて世の事
 も掛は茶候も掛を
 様くうきへ又うかひ
 室上家の内小汚世を
 時時夜中の悪疾も自
 うとくことこのれが夕
 らと用は掃除して清に
 なるべしうき世を兼と
 好むべしうき世を兼と
 ○飲食の事
 飲食の事にはうき世を兼と



といつてうき世を兼と
 食て懐ぬものなれ聊
 の費とちも積り度
 大なるて手先の用事
 り知るべし世を兼と
 て費の用事けりあま
 妻のものの勢もなれ
 とてうき世を兼と

らばその色紙わけ
 と種うて種む下種を
 種はと怒るよつ種く
 止く後小丈のむわう
 と此種種む下必死色
 と暴く一夢といひて

丈小道ひ叛くもなれ
 一云種と情とて多くは
 七傾うき人と誰に仍り
 りとべし人の情と多し
 わらむ心小傾あま人小傾
 一云種と情とて多くは

女大

十四

修小省略一節多合
物色にまじりては
採り外一して密に飲食
あはせて却てその弊を
とらふことあり其れは
も僅なるが合意を
人小使の十女十男れ
新ひ年を以て後と
いふるあり其れは多
らねば飲食とては
いへども不便の事あり
やかの十人も始りの程と
あれは往ては主と能
妻小不時小暇をて同
と寝すことあり十人も
いへども飲食も多し

くさるる親類と毛間
悪くならぬ家内活
一女を帯に心孝ひ
之身と堅く禮を獲る也
朝一早く起て衣
毎朝おぼろぎて家内

日一物と食守に己
味と嗜して下人
とさるる公も人の
日さたわたりて
司りて温かいと
りその子別か
新糖と色を温かい
の僕と子の方
にほかに
そき人をして
あはれを
夜小僕一人
これより
とて
まことの子
子と思ふ

此事にふして用ひ織造續
緋色をば亦茶酒を
と多く吞ぶるは
小唄清くうたの
くさるる家内
あなとむす人の多



近き世の教ありも我子
まゝ供おつせ下教のま
とつとも温公の言ふ同
さてたふしおれ女子也
嫁して飲食を掌る
し元よりそを務められ

中家所^{ちゅうけい}の^{しん}田十^{でんじゅう}兼^{かね}より内^{うち}の
修^{しゆ}り^りふ^ふり^りが^がら^らに^に

一^{いち}巫^い觀^{くわん}を^をま^まの^の子^こに^に迷^{まよ}ひ^ひて

神^{かみ}佛^{ぶつ}を^を汚^{けが}し^し近^{ちか}付^{つけ}権^{けん}よ

祈^{いの}ふ^ふる^るに^には^は兵^{へい}人^{にん}も^も乃^{すなは}勅^{しやく}成^{じやう}

よ^よく^くよ^よる^る時^{とき}に^に禱^{いた}ふ^ふと^とも^もて^ても

神^{かみ}仏^{ぶつ}を^をち^ちり^りに^に修^{しゆ}り^りへ^へ一^{いち}

一^{いち}人^{にん}の^の妻^{つま}と^とな^なり^りて^てい^いふ^ふ事^{こと}を^を教^{しやう}と

よ^よく^く保^{たも}つ^つべ^べし^し妻^{つま}に^に修^{しゆ}り^りあり^り

放^{はな}つ^つた^たな^なれ^れが^が家^{いへ}を^を破^{やぶ}り^り去^する^る

事^{こと}儉^{けん}し^して^て費^{つひ}成^{じやう}る^るを^を急^{いそ}ぐ^ぐ

う^うに^に衣^い被^ひれ^れ飲^{いん}食^{じき}を^をた^たり^りて^て免^{めん}

是^{こゝ}と^とい^いふ^ふ事^{こと}は^はい^いふ^ふ事^{こと}に^に違^{ちが}ふ^ふ
の^のま^まに^には^はい^いふ^ふ事^{こと}に^に違^{ちが}ふ^ふ
仕^しえ^えの^のま^まに^には^はい^いふ^ふ事^{こと}に^に違^{ちが}ふ^ふ
中^{ちゆう}の^のま^まに^には^はい^いふ^ふ事^{こと}に^に違^{ちが}ふ^ふ
ま^まに^には^はい^いふ^ふ事^{こと}に^に違^{ちが}ふ^ふ
害^{がい}あり^りと^とい^いふ^ふ事^{こと}に^に違^{ちが}ふ^ふ
衣^い被^ひれ^れ事^{こと}

衣被のしるす本の始
 め中粗のぬく元
 女のすくたてはは
 わまこぬきまも
 こがよきまも
 まを衣被のほけ
 その妻の心はく
 花粟麻のまも
 まがれくまも
 けつまつはれ
 の情情まも
 もあられくまも
 天令まも
 衣被のまも
 ねはくまも
 物上清きまも

衣被のしるす本の始
 め中粗のぬく元
 女のすくたてはは
 わまこぬきまも
 こがよきまも
 まを衣被のほけ
 その妻の心はく
 花粟麻のまも
 まがれくまも
 けつまつはれ
 の情情まも
 もあられくまも
 天令まも
 衣被のまも
 ねはくまも
 物上清きまも

身の方
 て察る
 一身の時
 逢下初
 うら解
 うら男女
 身の方
 察る
 一身の時
 逢下初
 うら解
 うら男女

身の方
 て察る
 一身の時
 逢下初
 うら解
 うら男女

女大

七

いたしやうとわれれあひて
 のをいふやうにうらなひ
 ありあつたうらなひは
 移りてみづの根もぬが
 その又六位の友人が
 べつ々の妻に按ずるに紀
 の有たか女史とも有た
 時代の帝にうらなひて
 時めく人かうぬれも
 世の世裏にうらなひて
 友人おぬれうらなひて
 の有た時めくうらなひ
 ちか六位に業もあつた
 ふうらうらなひもあつた
 江戸後の宮人今世に

縁起はびくと際けたるは
 晴て清とそ一人の
 目もまやどたぬる悪
 只らう身も悪どる成
 用ふべし
 一我郷の親れ方私

百石の石
 つらその妻
 のゆい今世先師乃小
 氏ててててててて
 親せむらうらなひ
 徳のうらなひ
 てかあのうらなひ
 ○衣被のうらなひ
 老人のうらなひ
 温中とてててて
 とてててててて
 けらうらなひ
 一人ふらなひ
 けらうらなひ

丈のゆれ親類と次
 ともうらなひ正月
 も先丈の方と勤て次
 親の方と勤て次
 汗さるるに何
 うらなひ私よ人
 然とててて



巨體おそふと云ふは
 一極その物を秋の夜に
 一極その物を秋の夜に
 一極その物を秋の夜に
 一極その物を秋の夜に
 一極その物を秋の夜に

やうな打て候は
 一息もをさへ
 一息もをさへ
 一息もをさへ
 一息もをさへ
 一息もをさへ

一女とりとの親の家と續び
 舅姑の跡と絶友との
 親よりも婿と大由の
 孝行をなせし嫁とて
 後の親親の家よりも
 稀なるべし一は代の家

大親の役と老へる者
 回成なまじり親に
 のよれとを修りて撰
 終るべし
 一卜初わらへば住まむ可
 のり自奉勞と倦え

一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種

勤むるも女の化法之男
姑の爲よ夜と縫合線
袢はのは衣ぬとぬぬ
席と掃子と膏汚と洗
おふ家内よ居て様
よ介あ出へいのうらん

とほの灰汁と洗
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種
一盥の付るに白粉種

一下女と仕ふふんとわふ
盥一云甲斐なる下篇
とぢあ一わ悪くてち智あなる
くむ奸あぬ物いとしと祥
たい一まのし男あ姑あ姨あ乃
みたと我らよ合あぬこと

洗

洗



若れは地性かよる
 むに世に替はれ
 りのりもこの法
 一紅深とくふは橋を
 の灰汁して洗ふ
 〇羽二を縮の糸
 洗ふと粘りもふ
 して粘毛してひく
 中へ籠子籠子のひ
 と洗ふ一及粘毛を

やいの若ふ白粉
 海薙を介介と
 布と海一粘毛を
 縮緬粘毛を
 減生教と介介
 て用ふ
 〇若れ法するふ白粉
 麻とすして布を海
 その汁と粘毛を
 先洗ふと妙
 〇麻の子深と麻平
 火と用とくは湯解
 けその湯れおは
 〇革調織のわす
 滑くる革の垢を

われは根小終せせて
 と却て君の為と
 婦人り智恵多し
 是と信よて必根と出
 来安し元来史の家
 人を化人なれば根と板

き悲老と終ると安
 捧く下女の詞と信よて
 大切なる嫌嫉の親と
 汚くもと終り下女
 猪ましく多とて無恥
 ならむを早く追出は

糞掃よりと付おそく
ほいその糞のまじり
干し...

○家宅の事

これをもたぬのまじり
ようてこふねと出た
かゝるの扱ひ...
これをもたぬのまじり
ようてこふねと出た
かゝるの扱ひ...
一電おれたらぬ
年につまはれぬ
磁石とこれに夜灯
一井の水は...

くると井の中...
は又何時か...
ての中...
用...
一電おれたらぬ
年につまはれぬ
磁石とこれに夜灯
一井の水は...

かやれ者い必親類乃中
とも云ふ備へげ家と礼
奉とたるりの心せらる
又身も老と使よ、死に
合ふること多し、又と世の
罵く止むれば、約くおね後

立り多しして家の内静
かゝる悪死のりわらわ
云ぬく誤り玉は
少れとらと忠て怒るの
らび心の内小憐れを
俄と圓く前て身はね

女大書

二二二

婦女たしる州
女のたしる州
さう中に後と見せ身一
るは一後の方物とめ
ふ様と一言もか
ことばの義をい
る美帝の時ふも
本朝とて神代も
て二種の神代も
そたとふの音
容貌のうら
あれいふも
いふが候
ふが
んが



たしる州
人の音
さう中に
るは一
ふ様と
ことばの
る美帝の
本朝とて
て二種の
そたとふ
容貌のう
あれいふ
いふが候
ふが
んが

はふべしと
子わく材と惜じ
但我れよ入ふ
ふそまぬりの
ふべしと
一丸婦人の
病をわが
恨ると人
智恵満き
十人よ七八
婦人の男
おなり自願
ふそまぬりの
但我れよ入ふ
ふそまぬりの
ふべしと
一丸婦人の
病をわが
恨ると人
智恵満き
十人よ七八
婦人の男
おなり自願

病をわが
恨ると人
智恵満き
十人よ七八
婦人の男
おなり自願
ふそまぬりの
但我れよ入ふ
ふそまぬりの
ふべしと
一丸婦人の
病をわが
恨ると人
智恵満き
十人よ七八
婦人の男
おなり自願

婦人

一四

されども情をこめて
 奉らざる茶服をさるる
 もたのて押虎素
 うむむお香後と
 されば誠々々磨く
 改小後たるやが
 ふうふうふうふう
 二
 身の備おむ
 つけく武志
 あはし赤空の
 きんか
 砥の粉と水と
 室の内
 むむむむむむむむ
 二

去一中の智恵乃法
 さあふ人の疾も救ふ女
 陰性なる陰、秋として暗
 一所以は女を男に比
 るふ要よて目前なる
 こと此とも知らば

〇 擲とさるるの
 わらわらわらわらわら
 送とさるるびて
 まま警甲
 の友これと女子
 挿てその身熱
 の用とさるる
 世との用と外
 管袋の作
 え之念と
 と親む
 未とさるる
 やらん人

人の排とさるるも辨
 史家子れ笑とさるる
 と成もあはれ科も
 人と怨と怒呪咀成ひ
 人成姑と憎とさるる
 独立んとあはれと人
 憎

○醫甲の格并を
 すれば、とらへて、さう
 ば、いふに、いふ、あ、あ、あ、
 知、ふ、ゆ、く、あ、修、平、ら、あ、
 板、お、の、せ、その、よ、よ、よ、よ、
 年、ら、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 よ、よ、よ、押、と、と、と、と、と、
 ○女中、醫、の、と、ら、む、じ、
 よ、よ、よ、裁、ら、う、う、あ、あ、あ、
 異、て、か、を、か、に、と、と、と、
 の、活、田、留、と、洗、お、婦、
 こ、の、女、の、丸、指、と、の、と、の、
 形、何、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 是、す、其、其、其、其、其、其、
 か、ら、う、う、う、う、う、う、
 又、も、も、も、も、も、も、



五、五、五、五、五、五、
 女、格、考、と、と、と、の、
 う、う、考、と、と、と、の、
 す、と、と、裁、と、と、と、
 い、と、と、と、と、と、と、
 は、と、と、と、と、と、と、
 板、と、と、と、と、と、と、
 時、同、作、の、愛、と、と、

ゆ、の、道、跡、ま、れ、て、い、れ、家、身、
 の、仇、と、ら、う、の、と、と、と、と、と、
 と、の、大、く、淡、核、し、子、と、育、
 身、で、も、毫、も、漏、れ、く、指、は、せ、
 悪、し、切、悪、た、る、故、り、何、
 事、も、我、身、と、強、く、丈、は、

道、べ、し、古、の、法、小、女、子、
 身、は、と、日、麻、の、下、お、脚、し、む、
 う、と、と、と、と、是、も、男、の、丈、お、
 娘、女、と、比、は、家、の、故、り、弟、
 の、よ、ふ、つ、と、と、と、と、丈、と、丈、と、
 家、身、と、後、り、我、た、ら、う、

髪は、是の時に
 流儀をいれしむ
 れど昔の風俗に
 人教をてをさ
 又のり今、柳
 て毒のす、り
 と、今と捨て
 大、今、の
 風俗を、
 今、今、
 考、今、
 捨、今、
 う、今、
 と、今、
 ○髪、今、

子小能事わらうても
 不ふた、亦、
 人よ、
 一、
 手て人よ、
 教身と、
 又人、
 改、
 中、
 中、
 後、

葉本、
 中、
 ○髪、
 御、
 ○髪、
 と、
 ○髪、
 の、
 湯、
 か、
 中、
 れ、

れても、
 能、
 仍、
 中、
 末、
 後、

○白粉の産出は殿
 の付生の時止すは
 中六 物鏡天宮の御宇
 他つ初産といふの造り
 始也といふは活小鏡成
 法といふは衛の法に
 やは白粉の性極粉と
 大しと別ふ茶粉とを
 とを如かん宮法物と
 考へて活小鏡とを
 活小鏡といふものあり
 水鏡用と載て粉極
 と呼すといふは
 又白粉の活物と活小鏡
 一と面如の粉とを
 考へて活小鏡と用ふ

右條 後時よりよく
 初一書付てね
 後一人志好ひる
 志めよ今代の人女子
 衣肢道るを多く
 て婚姻しむるもい

の思ふは必も
 くと男子不媚の具
 うは我々今世に
 らまをと作らぬ
 うは身と例の
 とまをわらふは
 心へん人の意と
 へんは活小鏡と
 乳かへんは中
 夜一切不用い
 小園の酒と活小
 もすれは活小
 活小といふは
 却て中といふ
 活小といふは
 うは活小といふ

條とよく
 と保實なる
 人よく百
 女子と嫁
 て十萬
 教ふこと



かくて人の情おろろ
 かくて人の情おろろ
 ○徳の粉を精粗わと
 無き白粉と用われぬ
 けひてりん若一教法よ
 さい用之ーこれと成
 小の粉と手と火のよた
 くよん笑ふるそと懐はあ
 さい懐はあそとてまは
 終

識るる女子は親と
 人の理を知らん
 わるる魚は
 終

女大学 終

